図書館への誘い

小　川　久　美

平成22年冬、山口大学国文「研究懇話会」にてお話させていただいたことを元に、司書職へ就くまでの道のりと仕事について書かせていただきます。

１．司書へ向けて

司書を目指す学生は毎年多いのですが、募集自体が少ないので正規の司書職に就くのはほんの一握りです。私も同様に、児童サービスに強い興味を持ちつつも、怖じ気づいて将来の選択肢から司書は削っていました。ですが山口県立山口図書館を訪れたときのこと、子ども資料室で行われていた絵本の読み聞かせを覗いてみるとキラキラと輝く子どもの瞳がそこにありました。絵本に見入って一緒に笑ったりドキドキしたりしている子どもたちの姿を見た瞬間、「私もこの瞳を子どもたちにさせてあげたい！子どもと本を結ぶ司書になろう！」と全身が震える思いがしました。その後も難関に飛び込む覚悟がつかず他の道を探っていたのも事実ですが、どうしても自分の将来像が浮かばず、このまま焦って就職するよりも本当にやりたいことをやろうと考えました。

そして、決定的だったのは児童サービス概論の教授・佐々木鶴代先生からいただいた一言です。子どもたちの瞳を見てからというもの司書への思いの火が消せず、自分に正直になろうと考え始めていた私は、思い切って佐々木先生に相談に行きました。「私はこういう理由でやっぱり司書になりたいんです。現実はどうなのでしょうか！」と。３年生の３月頃の話です。すると、佐々木先生は「確かに難しいけれど、可能性がゼロなわけじゃないんだから。１人でも募集があるのなら、あなたがその『１人』になるかもしれないのよ」とおっしゃったのです。初めて背中を押してくださった方で、この道に進めたのはこの一言のおかげです。早速その日から公務員試験と専門試験の勉強を始めました。

２．司書になると決心してから　～活動～

司書の道しか考えなかったため、民間企業や司書以外の公務員試験等は一切受験していません。卒業後は嘱託職員での図書館勤務の覚悟です。勉強すればするほど、まずは現場を知り経験を積まないことには面接でやりたいことを的確に伝えられないと感じ、佐々木先生にご紹介いただいて山口県立山口図書館で短期アルバイトをしました。その縁で「子どもと本ジョイントネット２１」という団体で子どもと本をつなぐ活動に関わり、イベントで絵本作家に同行して幼稚園・小学校を回ったり、各種イベントの手伝いや児童書の研修会にも参加させてもらいました。また、山口大学図書館で資料情報入力のアルバイトもしました。その頃、林伸一先生のご紹介で中学校へ絵本の読み聞かせに出掛けるようになり、そのため山口市立図書館へ絵本

を借りに行くようにもなります。そこの司書に相談をしたのがきっかけで、読み聞かせ勉強会に参加させてもらえ、小学校へ絵本の読み聞かせに出向くようにもなりました。

３．司書になると決心してから　～座学～

筆記試験には、教養試験と専門試験があります。教養試験対策としては、生協開講の公務員講座を４年生の４月から受け始めました。完全に１年遅れです。採用試験は５ヶ月後の９月。追いつくには周りよりも多くの努力が必要でした。試験日までにすべての講義を受講できないので、日々の講義内容はその時間で理解して覚えるようにし、受講できない講義は自分でテキストを紐解いて勉強を進めました。面接練習や小論文練習は、無理を言って１期前の学生が受けるものに混ぜてもらいました。

司書の採用試験はあまり専門試験の内容が公開されていません。知り合った司書から過去に受験した問題の記録やテキストを紹介してもらい、問題にあたりながら知識を増やしていきました。空きコマはもちろん、10分でも休憩があればすぐにテキストとノートを開いていましたし、食事を摂りながらもできるように常に何かの勉強道具は持ち歩いていました。

４．いざ試験

１次試験は教養試験と専門試験、中には１次試験から面接、論文（作文）も実施するところもあります。地方自治体によって試験日が重なっていることが多く選択が必要です。募集人数は概ね１人か若干名なので、倍率が50倍、100倍あるのは珍しくありません。

２次試験は、専門試験と面接、論文・作文がありました。専門試験は１次・２次ともに地域でかなりの違いがあり、択一式、記述式の穴埋めや1200字程度の論文など様々です。分類番号を問うもの、図書館史、法律、ベストセラーと著者を適合させるものなど多種多様です。論文では「目指す図書館員像」や「○○市のために自分ができること」「予約本連絡通知電話の際の対応」などがテーマにありました。面接については、日々考えていることや学んできたことを論文として文章にするか口述するかの違いだけだと思います。

５．学校図書館に勤務して

そもそもは第一線の図書館での児童サービスを希望していたので、市立図書館は不合格、第二線の県立図書館配属でもなく、学校勤務という辞令には戸惑いました。学校図書館に司書は１人。選書・装備・保存・応対・広報・図書館の特色創りなど図書館運営を一手に任されるので赴任当初は途方に暮れました。一人職種なので失敗も成功も自分の責任。結果は全て自分に返ってくるというのは大きなプレッシャーでした。ただ、その分挑戦し甲斐があるのも事実です。また、高校図書館は、図書館の最後の砦と言われています。卒業後就職する生徒もいるので公共図書館ユーザーを育てる最後の機会なのです。利用者の将来を意識して働きかける責任と生徒が成長していく姿を間近に感じられるのは、学校図書館司書だからこその喜びだと思います。PISAでの読解力の結果を受けて、授業に学校図書館を活用する流れが大きく起こってきている現在、教諭と共に授業に関わる機会も少しずつ増えてきていました。これからの学校図書館という土壌は、ますます興味深い世界であるとお薦めいたします。

６．最後に

学校図書館は、手入れや働きかけをしなければ誰も来なくなるので常に発信していくことが求められ、生きている図書館である重要性を学びました。そして、異動で公共図書館に職場が変わった今も、改めてその重要性を実感しています。現在勤務している県立図書館は強く宣伝をしなくてもある程度の来館者数はあります。しかしながら、その上に胡坐をかくのではなく、常に社会のニーズをつかみ、利用者を触発する図書館であり続けなければなりません。利用者の幅も要求も多様化してきている現在の図書館において、司書には変化を恐れない柔軟性や発信力、バイタリティが必要でしょう。

これからもひとりの司書として、訪れても勤めても奥が深い知的遊び場・図書館を創り続けていくつもりです。より多くのライブラリアンと図書館ユーザーに出会えますように。図書館でお待ちしています。

（おがわ・くみ）